

大阪 再発見

《CEL SERIES》

written by Tomoyo Kurimoto 栗本 智代

Vol.2



夏祭浪花鑑/錦絵より
(早稲田大学演劇博物館蔵)

◆第13回◆

上方歌舞伎の テーマパークとしての大阪



大芝居繁栄之図

～名作の舞台名所をめぐる～

今、歌舞伎といえば、市川新之助改め海老蔵襲名で話題が持ちきりであり、関西でも七月に松竹座、十二月に南座で襲名披露公演が行われる。歌舞伎というと、どうしても東京中心のイメージが強いが、もともとは関西で発祥、江戸期に大阪の道頓堀で人気沸騰し、大勢の見物客を集めた。名作の初演や名優の誕生など道頓堀をはじめとする大阪発のエピソードも数多くあり、今でもその足跡がまちの中のあちこちに残されている。

今回は、歌舞伎作品の中で、大阪を舞台にしたものをいくつか取り上げ、その背景や舞台となった名所を紹介してみよう。



松竹座

歌舞伎の舞台に選ばれた『観光名所』

多くの上方歌舞伎は、江戸期、大坂が天下の台所として経済的にも潤い、独自の娯楽文化が栄えた時代に初演されている。内容的にも、新町の廓や新地のお茶屋通い、寺社参詣や観音参りなど物見遊山のレクリエーションが盛んであったという当時の風俗を、そのまま反映させたものに人気が集まったようだ。実際に起こった心中や殺傷事件、実在人物や場所をわざとそのまま作品の中に起用して、現在のTVのニュースやワイドショーで話題にするように、芝居小屋で面白おかしく紹介するといった即時性があつたと考えられる。また、いろいろな階層の価値観や生活様式などが街の様相とともに浮き彫りにされている。

歌舞伎の舞台となつた場所には、当時、誰もが一度は行きたいと憧れた遊興スポットが選ばれたと考えると、その数の多さから、江戸期の大坂は、まさに娯楽のミュージアムであつたことがうかがえる。昔の賑わいを思い起こしながら、歌舞伎の作品に登場する名所の魅力を今見直すことも、都市の物語性を再確認する作業になるだろう。この章では、数多くの歌舞伎作品から「野崎村」と「夏祭浪花鑑」に関係する名所を追ってみる。

「野崎村」(新版歌祭文)の舞台

「野崎」(大東市は、お染・久松を主題にした近松半二作「新版歌祭文」の舞台であり、また近松門左衛門作「女殺油地獄」の最初の段にも出てくる。

野崎といえば観音さんであり、五月のはじめにお祭りがあつた。これを題材にした落語では、三代目桂春團治の十八番である「野崎詣り」があり、舟で行く人と、陸を行く人の口喧嘩の様子が楽しく描かれている。実際言い負かした方が、その年の運がいいと



野崎観音慈眼寺 / 境内



江口の君堂

される験かつぎのお遊びがあつた。また、昭和十年に東海林太郎が歌う「野崎小唄」(今中楓溪作詞・大村能章作曲)が大ヒットした。

野崎参りは、屋形船でまいる

どこを向いても 菜の花ざかり

野崎観音は、正式には慈眼寺(じげんじ)といい、曹洞宗の寺院である。無縁経法要・野崎参りが現在五月八日とされ、五月の一日十日がお祭り日となつている。本尊の隣には、江口の君堂がある。藤原時代末、東淀川の遊女であつた江口の君が、同寺で祈つて病氣治癒したお礼に本堂を再建したとして祀られており、婦人病と子授けのご利益があるため、特に命日の毎月十四日には多くの参拝者が集まつている。

さて、歌舞伎の「新版歌祭文」



お染久松の塚(慈眼寺境内)

の「野崎村」の段では、「観音さまにかこつけて、逢いにきたやらみなみやら」という浄瑠璃の文句もあり、野崎村にある主人公・久松の実家が舞台になつている。大坂の油屋の娘のお染が、その丁稚であつた久松と許されぬ恋に陥り心中したという実話をもとに、近松半二が「新版歌祭文」として書き、安永九(一七八〇)年に道頓堀の竹本座で人形浄瑠璃として上演され、後に歌舞伎になつたものである。「野崎村」の段は今でも人気を集める。

奉公先の娘・お染と恋におちた上、あらぬ濡れ衣をさせられた久松は、野崎村にある実家に帰される。そこへ養父の久作が実娘お光との婚礼を進めるが、お染が野崎参りにかこつけて久松に逢いに来て、事情を察したお光が、自分の久松への思いを犠牲にする決心で黒髪を切つて尼になる決意をする。お染の実家から迎えがきたので、お染と久松が駕籠と舟とで別々に大坂に帰っていく。

JR「野崎」駅前にある「きゅうさくばし(久作橋)」



現地に足を運んでみた。JR片町線(学研都市線とも呼ばれている)で、京橋から普通電車で六駅目の「野崎」駅で下車。駅前広場に赤い橋があり、よく見ると「久作橋」とある。久松の養父の名前を愛称としてつけたのだろうか。ここからまっすぐ商店街を進めば、小高い丘の上にある観音さんにとどり着く。境内は静かな情緒があり見晴らしもよい。地域の幼稚園や小学生が、あちこち階段や坂道を走り回っていた。「お染久松の塚」があり、もともと「久作茶屋」といつていた小さな売店では、お染久松せんべいも売っている。鐘楼で鐘をつく。一七〇八年に鑄造のもの。「野崎の鐘のつきっ放し」といわれ、いつでもついで構わないうが連打は火事の合図になるため厳禁だそうだ。

元禄の昔から、縁結び、安産、子授け、開運、厄除けなどのご利益があると有名で、大坂人が日帰りで手軽にお参りできる観音さまとして庶民の信仰を集めていた。安産のお礼まいりで奉納された犬のお守り群が、多くの参拝客を語っている。特に女性であ

れば、一度はお参りしておきたい。都心からの気軽な旅だが、屋形船でお参りした江戸期ののんびりした風土や歌舞伎の恋物語を思い起こさせるような澄んだ空気が心地よい、現代の名所でもある。

「夏祭浪花鑑」の舞台

大坂の風俗や生活、季節感がうまく作品に練りこまれていているものの代表作品として「夏祭浪花鑑」がある。延享二(一七四五)年、竹本座で人形浄瑠璃として初演されたものを同年八月に歌舞伎化したもので、並木千柳らによる合作。タイトルが示すように上方芝居であるが、現在は東西の型があり、劇場の体裁や演出を変えながら上演され続けている。

玉島兵太夫の子息磯之丞は、遊女琴浦と深い仲となり家を勘当される。魚売りの団七九郎兵衛は、琴浦に横恋慕する大島佐賀右衛門の下僕を傷



上方絵「夏祭浪花鑑」(重春画、二代目中村芝翫/早稲田大学演劇博物館蔵)住吉鳥居前のシーン



住吉大社 / 鳥居(「夏祭浪花鑑」の舞台)

つけ牢に入るが、兵太夫の尽力で放免となり、一寸徳兵衛や釣舟の三婦らとともに磯之丞の援助を誓う(住吉鳥居前)。ところが磯之丞は、奉公先の道具屋で悪番頭を殺してしまい、三婦は、徳兵衛の女房お辰に磯之丞を預ける。一方、団七の女房お梶の父である義平次は、佐賀右衛門の手先となり琴浦を誘拐(三婦内)。これを止めようとした団七は、義平次に散々侮辱され、ついに舅殺しの大罪を犯してしまふ(長町裏)。

まず、「住吉鳥居前」の段での、団



住吉大社 / 高燈籠「夏祭浪花鑑」の舞台)



住吉大社 / 反橋
住吉大社は、有名な上方歌舞伎作品の舞台になっている

七の出牢の場面の舞台設定は、「住吉大社」の石の鳥居が上手寄りに、その後ろに高燈籠と、住吉大社で今でも確認できるランドマークがそのまま背景になっている。下手寄りには、団七役者の紋を染め抜いた暖簾をかけた床見世。主人公団七が牢から出た時のむさくるしい姿から、再び床屋から出るさっぱりした浴衣姿との対比が特徴的な場面である。住吉大社は、「夏祭浪花鑑」の他にも、「摂州合邦辻」や「敵討天下茶屋聚」「野晒悟助」など芝居によく登場しているが、古来、名勝としても海の社としても、大坂人の信仰と憧憬の的であった。

次に「三婦内」。つまり釣舟の三婦の家の場面だが、高津神社の夏祭りの宵宮の晩という設定。現在の日本橋、国立文楽劇場の東側、高津一丁目付近にあたり、高津神社の氏子域、宵宮ともなれば、だんじり囃子をバックミュージックに、あたり全体が祭り一色になっていた時の出来事とわかる。高津は落語でも「高津の富」



上方絵「夏祭浪花鑑」(広貞画、四代目中村歌右衛門/早稲田大学演劇博物館蔵)泥場のシーン

琴浦を誘拐した義平次を追いかけた団七が殺しをする、有名な「泥場」のシーンが「長町裏」の段。日本橋筋の裏手(今の日本橋三丁五丁目あたり)は、江戸時代は貧乏長屋の並んだまちであった。一説によると、日本橋筋に「名呉橋」といつ橋があり、もともと名前がなかったたので名を呉れ、というので名呉橋となった。そこから町名が「名呉橋」「長町」になったという話がある。家賃も月払いではな



高津宮

や「高倉狐」などに取り上げられているほど江戸期から人々に親しまれた神社で、特に高津宮の夏祭りは、なにわの風物詩として欠かせないものになっていた。

その他、あまり上演されないが、磯之丞が殺人を犯した後道具屋の中と心中しようとしたのが天王寺の安居神社(真田幸村が戦死した場所として有名)であったり、現在の谷町七丁目(田島町の「団七内」)以前南区田島町といったの場所であったりする。



安居神社境内

く日払いで、大坂の最低の生活であったという。実際、日当たりの悪いぬかるんだ沼地で、夜は殺人が起きかねない場所であったのだろう。衛生不良で乞食が集まるような雰囲気、歌舞伎の「泥場」の舞台としてはワタリである。この貧乏長屋域は明治期に入ると、さらに東西に拡がったようだが、明治三十六年、天王寺で開催された「内国勸業博覧会」会場への通過点にあつたため、規定が設けられて整備され、もともといた人々はこの地域を追い出され、最終、釜ヶ崎に集まったという経緯がある。

歌舞伎の舞台めぐり・トレイルコース

大阪には上方歌舞伎に関わる史跡や名所が固まって残っている地域がいくつかある。作品の舞台になった場所や登場人物の石碑や塚、あるいは歴代俳優や義太夫の墓など、特に上町台地やキタ・ミナミの繁華街に多く、結果として大阪を代表するようなエリアを散策することになる。ここではその代表的なめぐりをあげてみよう。

上町台地エリア

四天王寺〜下寺町界限

この界限は、江戸期から三十三か寺観音めぐりやお大師さん(弘法大師)参りのルートになっており、緑と四季おりおりの花が美しい、まさに物見遊山の格好の名所であり、当時の観光コースである。

四天王寺は、聖徳太子建造の日本



摂州合邦辻より
(豊国画/早稲田大学演劇博物館蔵)

最古のお寺として有名で、特に西門はそのシンボルとして、以西にすぐ海が広がっていたため見晴らしもよかた。信仰の場としても認知されており、俊徳丸の伝説をベースにした、摂州合邦辻「や仇討狂言の代表作、敵討天下茶屋聚」の舞台になっている。また墓地には、坂田藤十郎や初世竹本義太夫、並木五瓶らの墓がある。

下寺町へ移ると、八代市川團十郎、初代中村宗十郎の墓がある。一心寺から寺院が続く。少し西へ歩くと、西方寺閻魔堂。「摂州合邦辻」でよく演じられる合邦庵室の舞台がここである。下寺町を北へいく。勝鬃院愛染堂は、「冥土の飛脚」ゆかりの地、



四天王寺 / 西門



生国魂神社



浄国寺(夕霧太夫の墓所)



青蓮寺(竹田出雲の墓所)



心中宵庚申・お千代半兵衛比翼塚



勝鬘院愛染堂



合邦辻 / 西方寺閻魔堂



市川團十郎(八代)墓 / 一心寺内

- *坂田藤十郎...元禄期に上方歌舞伎の和事をつくりあげて後世に伝えた。
- *竹本義太夫...義太夫節の創始者。貞享元年(1684)、道頓堀に竹本座を立て、後の曾根崎心中の上演で名声を高める。
- *並木五瓶...歌舞伎作者。
- *八代市川團十郎...幕末期に活躍。人気絶頂の嘉永7(安政元)年夏、大坂で謎の自死を遂げる。
- *初代中村宗十郎...明治初期に活躍。上方の演劇改良運動の先頭に立つ。
- *「冥土の飛脚」、「心中宵庚申」、「曾根崎心中」、「生玉心中」、「夕霧阿波鳴渡」...いずれも、近松門左衛門の原作で上方歌舞伎の代表作になっている。

銀山寺には、「心中宵庚申」のお千代・半兵衛の比翼塚がある。生国魂神社は、「曾根崎心中」や「生玉心中」の舞台である。その他、竹本座の座本で浄瑠璃作家の竹田出雲の墓がある青蓮寺や「夕霧阿波鳴渡」の夕霧の墓がある浄国寺など、集中している。

このあたりは美しい坂道も多く、大坂の街の中でもっとも自然が豊かに残されている歴史の散歩道ソーンである。織田作之助の「木の都」の舞台などにもなっているが、さらなる整備が望まれる地域である。

- *片岡仁左衛門...上方で唯一十数代を重ねた名跡。元禄期から実恵の名手で、七代目でその名前が再び表舞台に出る。
- *中村富十郎...享保～天明期に活躍。若女形の第一人者ながら立役もこなした。
- *岩井半四郎...明和から寛政にかけて活躍。
- *実川延若家...上方歌舞伎の演技演出に大きな影響を与えた。初代は明治初期から中期、二代目は大正から昭和にかけて、三代目は戦後に活躍。
- *中村扇治郎...初代は、明治後期から昭和初期にかけて大阪の顔と称された名優。上方和事をはじめとする狂言や新作に多くのあたり役を残す。
- *中村歌右衛門...初代は、宝暦から天明にかけて(1751～88年)活躍。廻り舞台などを発明した並木正三の作品などで注目を浴びる。その実子が三代目で上方歌舞伎の巨星として活躍。
- *中村芝翫(三代目)...文化12年～弘化4年(1815～47)頃活躍した歌舞伎役者。祖父が中村歌右衛門(二代目)。
- *中村梅玉(三代目)...大正から昭和半ばにかけて大阪で活躍した女形。初代扇治郎の相手役としても有名で、四代目福助襲名後、昭和10年に梅玉を襲名。



初代中村扇治郎・四代歌右衛門などの墓が並ぶ常國寺

東に隣接して、歴代歌舞伎俳優のお墓が密集している。薬王寺には、片岡仁左衛門家初代中村富十郎、初代岩井半四郎、團妙寺には、初代、三代実川延若、正法寺には初代、三代中村歌右衛門、三代中村芝翫、二代富十郎、妙徳寺には中村梅玉家。常國



片岡仁左衛門墓(薬王寺)

中寺町界限



團妙寺



妙徳寺

寺は、初代中村扇治郎、二代、三代中村芝翫、四代歌右衛門...。お墓自体はひっそりとたたずんでおり、観光名所的な派手さはないのだが、これだけ密集しているところは珍しい。上町台地の寺町の中でもこのあたりは昔の雰囲気をとどめている道で、高津宮とあわせて上方歌舞伎を語る重要なエリアである。

キタ・梅田エリア

近松門左衛門作の有名な作品の「曾根崎心中」や「心中天網島」などの舞台であり、繁華な北街を抜けて歩くコースである。今とはまったく違う昔の新天地や周辺の雰囲気、想像力を働かせながらめぐる。地名や橋名など名称は変わらず残っていると「ころが多いが石碑などは少なく、あっても微妙に位置がずれている。原本に出てくる「しじみ川」は、新地でしじみ堂島上通りと新地本通り間で現在飲食店が立ち並び位置に流れていたことになる。「しじみ川」の

新たにお目見えした、お初と徳兵衛 / ブロンズ像



露天神社



しじみ川跡碑

石碑は、実際のその川跡の位置よりやや北側(新地本通りより北)の新天地の真ん中にある(曾根崎新地一五)。その南斜め前にあるのが「心中天網島」の舞台となつたお茶屋「河庄」の跡碑。「曾根崎心中」の舞台であるお茶屋「天満屋」は、さらに西、現在の堂島三の交差点近くにあつたといつが当時の堂島新地が今曾根崎新地と呼ばれている一部と重なっている。曾根崎心中の心中場所であつた「露天神社」は、「お初天神」という別名がつくほどゆかりの地として地域に浸透しており、「お初徳兵衛ゆかりの地」と記した石碑や二人のイラストが入った絵馬などがお馴染みであつたが、さらに今年の四月七日、新たにできた慰霊像(ブロンズ像)がお披露目され、除



商店街の新たな垂れ幕



河庄の跡碑

幕式には中村鷹治郎と断雀が列席した。お初天神商店街の垂れ幕も、「ブロンズ像」のお目見えをPRしたものが新たに作られている。また、「心中天網島」の小春・治兵衛の道行に出てくる橋「くし」梅田橋、緑橋、桜橋、難波小橋と、西からしじみ川にかかる橋の名前であり、現在、梅田橋は「くし」名で、桜橋は交差点の名前で残っている。石碑が交差点よりやや南寄りにある。天満の天神さん(天満宮)も歌舞伎によく登場しており、同作品の紙屋治兵衛の店があつたのがこの天神さんの前である。また、近松門左衛門「生玉心中」の二人が、天満宮内のお茶屋で逢つたという場面設定などにも使われている。「心中天網島」の心中の場所である「大長寺」は、桜之宮公園近くにあり、二人の比翼塚がある。初演後、二人をあわれんだまのちの人が建立したといわれる現在のものは、大水に流された後、明治期に再建された。現在の大長寺は移動後の場所であり、もとの場所は今の藤田美術館(太閤園の向かい)の位置になる。

ミナミ・道頓堀エリア

道頓堀川界隈は、江戸期以降芝居まちとして大小の芝居小屋が立ち並び名所であつた。東道頓堀にかかる現在の「下大和橋」は、「生玉心中」で主人公の嘉平次が来店している場所(「大和橋」とされている。また「相合橋」は、「心中重井筒」に出てくる橋で「このあたりは六軒の茶屋がある遊里だつたので、六軒町と呼ばれてい



下大和橋

た。役者は、道頓堀より北側の、今でいう中央区あたりに住んでいることが多く、初代中村鷹治郎も、東心齋橋二丁目あたり、もとの玉屋町に居を構えており、笠屋町(今の宗右衛門町あたり)には、松竹の白井松次郎、初代市川右團次、初代・二代実川延若、三代中村断雀などの住まいがあつた。道頓堀川周縁には、官許の芝居小屋として櫓をあげた劇場だけでなく、多くは浜側に、櫓をあげていない小屋がたたくさんあり、最盛期の寛文(一

上方歌舞伎の復興を目指して

戦後、昭和30年頃から歌舞伎の制作が東京中心になり、大阪在住の役者が減ると同時に、大阪の歌舞伎が上演される機会が少なくなり、役者自身が私財を投じて自主公演をしないと、上方歌舞伎の灯が消えてしまいかねない時代があった。そこから、少しずつ歌舞伎への気運を盛り返そうという動きが起こってきた。その1つが「関西・歌舞伎を愛する会(以下、「愛する会」)」の活動である。当初は「関西で歌舞伎を育てる会(以下、育てる会)」といい、昭和53年12月20日に立ち上がった(平成4年に「愛する会」に名称変更した)。

それまで毎年5月に行われていた大阪での顔見世がなくなったことを一つの契機に、『歌舞伎という伝統芸能を次代に伝えたい』と、大阪の民間(大阪民労協)が中心となり、経済界や行政、文化人たちとともに、関西の歌舞伎界を応援しようというムーブメントが起きた。そして専属の事務局を設け、歌舞伎ファンを増やす活動に踏み切ったのである。スタート当初は、すぐに会員が400人から1000人へと



川島 靖男さん

増えた。「公演の数も少なかったし、歌舞伎に飢えていた人が多かったのでは」と、「愛する会」事務局長の川島靖男さん。当時の道頓堀朝日座で行われた結成公演では、「歌舞伎のみかた」というプログラムを取り入れ、実際お客さまに歌舞伎の「馬」に乗っていただくという趣向で、わかりやすく楽しい大衆の文化として歌舞伎

を認識してもらおうと試みた。

さらに夏恒例の船乗り込みが、昭和54年、数十年ぶりに復活した。中之島の市庁舎南側から乗船した歌舞伎役者が、土佐堀川から東横堀を経て道頓堀川へと巡行するパレードで、幟や提灯、お囃子など賑やかな舟上から役者や後援者が、川岸のファンにご挨拶するものである。大正期までは盛大に行われており、それが夏の中座歌舞伎興行の前触れとして復活して水都大阪の風物詩として定着したのは、後援者側と役者側の、大阪での歌舞伎復興への思いと尽力があったからこそであろう。『この先衰退することはあっても復興されることは難しいだろう』と考えられていた上方歌舞伎が盛り返してきたことは、特記に値する。

「育てる会」は若手俳優の育成にも全面的な支援を行い、「若鮎の会」という関西若手俳優有志による勉強会を開き、昭和55年から平成元年まで十回公演を行った(その後、平成2年からは、若鮎の会以外にも上方系の俳優が加わって、国立文楽劇場が新たな勉強の場として「上方歌舞伎会」を主催するようになった)。

昭和から平成に移る中で、上方歌舞伎を担ってきた鷹治郎、仁左衛門の代が替わり、それぞれの屋号をもつご子息若手たちも育つ中、歌舞伎ブームが起きた。ピークは平成2年頃

から5年間位と聞くと、TVなどによく出演していた(当時の)片岡孝夫、藤十郎、勲九郎、八十助ら花形役者が中座の七月公演にも出演し、大勢の若い観客が押しかけた。ちょうどそのブームがはじまった年から、三代目中村鴈治郎襲名披露公演がスタートする形になった(平成6年の春に、重要無形文化財各個指定、いわゆる人間国宝の指定を受けている)。

平成9年、大阪松竹座が関西演劇の殿堂としてリニューアルオープンすると、松竹(株)は、



大阪松竹座 浪花花形歌舞伎チラシ (協力:松竹株式会社)

上方歌舞伎の発展と伝統の継承を目的に、ひろく一般より歌舞伎俳優を目指す若い人材を募集し、研修・育成する「上方歌舞伎塾」を開設。一期生8名でスタート、2年ごとに募集して、現在3期生5名が卒業したところだ(「愛する会」も支援寄付金を募り贈呈している)。「平成若衆歌舞伎」と題したシアタードラマシティでの新作公演も、2002年に片岡秀太郎監修のもと、上方歌舞伎を

担う若手俳優たちが集結した舞台として幕をあげ、今年8月、第3弾公演が行われる。一方、近松門左衛門の作品を世界へ紹介したいと、鷹治郎が1982年に旗揚げした「近松座」の取り組みや、松竹座での「浪花花形歌舞伎」と題した若手による近松世話物の昼夜3部制興行実現など、一歩ずつだが着実に大阪に歌舞伎が再び根付く機会が増えている。



現在の角座

六六二年には歌舞伎六座、浄瑠璃五座、説教七座、からくり(あやつり)一座、舞四座があり、元禄十二(一六九九年)には、四十八軒の水茶屋が許可を得て湯茶を出し、いろは茶屋と呼ばれていた。近松作、心中一枚絵草子では、曾根崎心中のお初がいた堂島のお茶屋、天満屋の遊女お島が、竹本座(曾根崎心中が初演された劇場)で芝居見物の後、道頓堀川へ屋形船でくりだしている。道頓堀界隈は、浄瑠璃や歌舞伎を上演する小屋と、作品の舞台と、両方を兼ね備えた地域であった。天保十三(一八四二年)に櫓を掲げている芝居小屋が五座になったので、「五座の櫓」という言葉が浸透した。

その中で、つい最近まで残っていた浪花座、中座も次々となくなり、芝居街の面影は現在ほとんどない。角座、中座、浪花座という名前だけが、同じ通りのビルの名前に残されている。以前、浪花座の前にあった「竹本座跡」



中村鴈治郎(二代目)紙屋治兵衛
(心中天網島、春仙画/早稲田大学演劇博物館蔵)

また近松門左衛門作「今宮心中」の心中場所である今宮戎。一月十日の十日戎は昔からあまりにも有名である。

の石碑も今では見当たらない。大阪で歌舞伎興行が定期的に打たれる松竹座は、大正十二年、映画や歌劇の劇場としてオープンしている。

そのほか、歌舞伎の上方和事には欠かせない舞台の一つが、大阪で唯一幕府に公認されたという廓街である新町。「夕霧阿波鳴渡」の夕霧太夫や、冥土の飛脚「梅川が実在した」という格式のある揚屋が九軒建ち並んでいたことから九軒町ともいわれ、桜の美しさも有名であった。現在は、新町北公園の一隅に「新町九軒桜堤の跡」と書かれた顕彰碑が立ち立っている。そのすぐそばには、「初世中村鴈治郎生誕の地」という碑もある。夕霧がいた遊郭・扇屋で生まれたからで、その上には「番妻ぼつろ、忠兵衛」の看板がかかっている。梅川・忠兵衛の名前には「ちなんだもの」である。

歌舞伎のテーマパーク

歌舞伎は古典芸能の中でも、物語、役者、衣装、舞台美術とエンターテイメント性が強いがさらに親しみやすくするために、さまざまに工夫が凝らされ改良されてきた。もともと大坂・道頓堀などで初演された人形浄瑠璃から転じた作品も多く、役者の系譜も含めて、物語が大阪のあちこちに点在して残っている。関連する地名や神社、仏閣、石碑などが意外にもまだ現存していることを確かめると、大阪の都市イメージが随分と変わり、まさに大阪が歌舞伎舞台を体験するテーマパークであると感じる。

実際、役者さんとも名所旧跡

をめぐると、バスツアーが企画されれば全国からファンが集まるといって、大阪市長主催の「関西・歌舞伎を愛する会」後援の「シリーズお芝居探検隊」では文化プロデューサーの河内厚郎さんを隊長に、その日のテーマに沿った半日ツアー「オキングコース」が好評である。

大阪という都市が持つ魅力として「歌舞伎」という演劇ソフトそのものはもちろん、その舞台となるソフトハードが都市の中に実在し、いかにわかりやすく楽しく享受できるかということが次なる課題となる。行政や民間、住民がそれぞれの強みや個性を活かしながら、「歌舞伎」という資源をベ-



道頓堀芝居まちの賑わい(明治中期)/大阪市提供

スにした多様なプログラムを企画・発信していくことが、これからの大阪の都市観光や文化による都市政策の要となるだろう。

(大阪ガス エネルギー・文化研究所
主任研究員)

主な参考文献

今回は特に多数の文献の他、河内厚郎氏や「関西・歌舞伎を愛する会」に資料を提供いただいた、オリジナル作成資料や掲載新聞なども参考にしたため、ここにはその一部のみ紹介する

- 『歌舞伎名作事典』 演劇出版社 1996年
- 『歌舞伎鑑賞事典』 水落潔 東京堂出版 1993年
- 『芝居絵に見る江戸・明治の歌舞伎』 早稲田大学演劇博物館編 小学館 2003年
- 『歌舞伎手帖』 渡辺保 講談社 2001年
- 『国際観光学を学ぶ人のために』 世界思想社 2003年
- 『米朝ばなし』 桂米朝 講談社文庫 1984年
- 『大阪まち物語』 なにわ物語研究会編 創元社 2000年
- 『私の大阪散歩』 難波利三 山と溪谷社 2002年

「大阪人」、「上方芸能」、「演劇界」
バックナンバー
他